

国際・武道・大学のために
—フランス語圏欧州を中心とした武道研究の現状調査からの探究—

三吉野 滋樹

**Internationalisation, Budo and University:
Research from a survey of the current state of Budo studies mainly in French-
speaking Europe**

Shigeki MIYOSHINO

Abstract

The importance of surveying the current state of “internationalisation” of “Budo [Japanese martial arts]” studies has long been acknowledged. However, even if we confine to the current state in the humanities and social sciences, it is difficult to say that attempts have been made in an adequate way. Without the ability to respond appropriately to the issues and questions that naturally arise in various regions of the world, academic institutions such as “university” cannot attract the attention and intellectual recognition of the world's peoples. Here, based on a survey of the current state of Budo studies (in humanities and social sciences), particularly in the French-speaking regions in Europe, a research is made from the perspective of the history of ideas : this is the task given to me.

In this article, a large number of Budo studies in French-speaking regions is surveyed and explored. First, the results of the survey were presented, noteworthy studies are described and an overview of Research centres and collections in the French-speaking countries is given. Next, about the latest research trends, which are developing significantly, their directions or specific issues are identified. Finally, based on this, an original, hitherto unexplored examination of international research of Budo unfolds from my philosophical and actual perspectives of the East-West culture and society.

The article suggests points of discussion about Budo from the present to the future, while problems, such as *spirituality* and *physicality* on the one hand and *globalisation*, *pluralism* and *war* on the other, become pressing issues for people at a turning point in the world history. It marks an important step in opening up the horizon of response, dialogue and thought that an “university” involved with “Budo” should show in the context of “internationalisation”.

キーワード : Budo, Japanese martial arts (武道) , internationalisation (国際化) , university (大学) , French-speaking regions (仏語圏) , physicality (身体性) , spirituality (精神性) , globalisation (グローバリゼーション) , plurality (多元性)

和文抄録

「武道」をめぐる「国際」化の現状調査については、その重要性が指摘されて久しい。しかし、海

外の人文・社会科学的な武道研究の現状に限っても、理解と考察の試みが十分なやり方でされてきたとは言いがたい。世界各地の問題意識や問いかけを理解できず、適切に対応できなくては、「大学」のような組織が世界の人々の関心を引くことはできず、知的な評価もされにくいだろう。まずは、欧州仏語圏を中心とした武道／マーシャルアーツ研究（人文・社会科学）の現状調査に基づき、思想史的観点からの探究を試みる——これが、筆者に与えられた課題である。

ここでは、多数の仏語圏の研究文献を調査し、幾つかの論点からの探究を行った。まず、調査結果を提示し、注目すべき研究について記述し、研究拠点・論集の概要を示した。ついで、大きく変化する最新の動向について、方向性と問題点を明らかにした。そのうえで、東西に互るアクチュアルな視点での思想史的・哲学的見地から、国際的な武道研究や武道への関心について、独自の考察を行った。

本稿は、世界の大きな転換期において、一方では精神性・身体性が、他方では戦争・グローバリゼーション・多元性が人々の喫緊の問題となるなか、現在から未来における武道についての論点を示唆し、「国際」化のなかで「武道」にかかわる「大学」が示すべき応答・対話・思考の地平を開く——少なくともそのための一歩をしるしたものである。

「武道」——「日本」の「武道」——をめぐる国際化の現状調査については、すでにその重要性が指摘されて久しい¹。また、グローバリゼーションと情報化の社会が、時代の画期をなすと思われるここ数年のさまざまな出来事を経て、大きな転換点を迎えている今日、武道の国際化の文化的・社会的現状——さらには、この現状において、世界の多地域の人々からなされる武道の実践や文化的背景についての問いかけ——も、鋭く変化し、多様なものとなってきている。2022年開催の「日本とハンガリーを結ぶ武道文化交流事業」の「閉会の辞」の言葉でいえば、（「武道」が「日本」由来のものだとしても）「武道はすでに世界各地の人々のものになって」²いるのであり、武道に関わる日本の大学や日本の武道研究者たちも、国際化の中でどのように判断・選択・行動していくかが否応なく重要な情勢である以上、こうした現状や問いかけを理解することは、緊急の課題として、強く求められている。しかし、これまでのところ、海外の人文・社会科学的な武道研究の現状に限っても、その理解と考察の試みが十分なやり方でなされてきたとは言いがたい。国際武道大学附属武道・スポーツ科学研究所発行の『武道論集 III グローバル時代の武道——比較文化論的考察とグロ

ーバル化に向けての課題——』（2012年、とくに巻末の「外国語による武道文献」）³や、日本武道学会における国際武道会議の記録などを見ると、重要な論考や発表がある一方で、武道をめぐる海外の研究文献調査やその検討に関しては問題なしとしない。この国際的な現状に対応して、大学のような研究・教育機関が独自の応答・発信・対話を準備するための、アクチュアルな情報の把握（たとえば、多少とも網羅的で、多領域の研究の新しい情報や動向に順次対応する「データベース」構築）が必要だが、そうしたことが持続的になされるまでには至っていない。

上記の「日本とハンガリーを結ぶ武道文化交流事業」での「質疑応答」の際にも見られた問題だが、武道を「文化」と言うとしても、世界各地の問題意識や当然出てくる普遍的・具体的な問いかけを理解せず、適切に対応できなくては、世界の人々（大学の立場からいえば、学生・研究者・一般）の関心を引くことはできず、知的な評価もされにくいだろう⁴。「国際」的な場での「武道」をめぐる「大学」による対話の空間を開くために、まずは欧州仏語圏を中心とした武道／マーシャルアーツ研究（人文科学・社会科学）の現状調査に基づき、武道の国際化の現在、さらには未来について、思想史的・哲

学的な観点からの探究を試みること――これが、筆者に与えられた課題である⁵。とはいえ、文献収集などをはじめさまざまな条件から制約が大きく、完全な調査は望みえず、遺漏は多い。

現時点での論述は、将来の本格的な調査・探究のための一歩にすぎない。本稿の前半部で紹介・把握されている、フランスでの研究文献、フランスの博士論文の著者名・研究分野、英仏語圏のいくつかの学会の概要や活躍中の研究者名・研究分野、さらに最新の研究動向などは、日本では初めて（限定された条件においてではあるものの）ほぼ網羅的に調査・報告されるもので、仏語圏を中心とする欧州でどのような研究者がおり、どのような研究がなされているかを知ることができる点、研究上の交流などの実用に供するものでもある。もちろん、それだけではなく、この調査をふまえた後半部では、仏語圏地域を中心とする現在の国際社会の情勢や、武道の現代哲学的考察への筆者の関心にもとづき、研究動向の検討とそこからの探究が行われる。その探究では、当該地域での問題意識・問いかけと背景を究明し、さらに独自の考究を進めて武道の国際化の現在と未来にかかわるいくつかの論点を提示・考察し、ささやかながら、国際的な応答と対話のための地平を開くことを試みる。

なお、短い紙幅では、すでに執筆したものの全文を掲載できず、本稿は、おもに序論にあたる部分に後半部から抽出・付加するなどして、短縮・再構成したものであることを断っておく。全体は別の機会にまとめて発表したい。

I 欧州仏語圏を中心とした武道研究の現状

1. 文献調査

「武道」を意味する語として、仏語圏では、「Budo」または「Budô」が用いられることもあり（しばしば大文字ではじまる）、Budo

Édition という武道書籍専門のフランスの出版社（社名マークには漢字で「武道出版」と書かれている）も存在する⁶。だが、一般的に言って、学術的な場では、英語の「マーシャルアーツ（martial arts）」にあたる「アール・マルシオー（arts martiaux）」が用いられることが多く、日本列島で近現代まで発展してきたいわゆる「武道」を言う場合には、「日本のマーシャルアーツ（arts martiaux japonais）」と表記されることが多い。フランス語の辞書や百科事典の定義を見れば、「arts martiaux」の語だけで、極東（とくに日本）起源の、個人が行う闘いの技芸・技法を指す、とされている場合も多いが、英語圏と同様、世界の多地域のもの（カラリパヤットからカポエイラまで）はもちろん、近代的な「コンバットスポーツ（英 combat sport、仏 sport de combat）」以前の古代ギリシア・ローマや中世ヨーロッパの伝統的な闘いの技芸・技法についても、「arts martiaux」の語が（学術書においても）使用されている⁷。下記のフランス国立博士論文センターやフランス国立図書館の目録では、指定された検索語としては「Budo」ではなく「arts martiaux」が用いられている。

「研究現状報告（仏語でエタ・プレザン état présent）」のためには、文献目録の作成が重要なことは言うまでもないが、筆者は、フランスで公刊・発表された武道またはマーシャルアーツに関する近年の博士論文・書籍・雑誌論文など研究文献（人文・社会科学分野）の情報を、限定された条件ではあるが広く調査した。フランスで修了または進行中の博士論文を検索できる国立博士論文センターのインターネットサイト Thèse.fr で「arts martiaux」などの語によって検索すると、60年代から現在までを見た場合、日本地域由来の「武道」に関するものと思われる博士論文は、人文・社会科学関連で、少なくとも三十数点が存在する。やはり柔道に関するものが比較的多いが、柔道については、ここで取り上げる人文・社会科学分野より、運動科学な

どに関わるものも多い。また、とくにフランスの柔道に関しては「スポーツか武道か」という論点も無視できないが、この点については別考を要する。空手に関するものも多く、さらに合気道・剣道などが対象とされている。むろん、日本地域ではない他地域のマーシャルアーツに関するものも多く、カポエイラや中国由来の「武術」に関するものが相当数あるほか、インドネシアのポンチャック・シラット、インドのカリパヤット、MMA(総合格闘技)に関するもの、また仏語圏を対象としてはセネガルやマダガスカルやブルターニュ地方や中世のマーシャルアーツに関わるものなどがある。題名・要約やその他の情報から判断して(情報の制約によって選択が恣意的なものとなってしまうが)、日本の「武道」に関するものを中心に、注目すべき博士論文の著者名・学位取得年・対象・分野を挙げれば、ベルジュレ(Bergeret, 1983、柔道、教育学)、クレマン(Clément, 1985、レスリング・柔道・合気道、社会学)、ティリオン(Thirion, 空手・剣道、教育学、1986)、フーケ(Fouquet, 1989、武道、哲学)、時津賢児(Tokitsu, 1993、宮本武蔵、極東研究)、シャンポー(Champault, 1994、武道、人文科学)、ロゼロ(Rosello, 空手、社会学、1994)、グラヴ(Grave, 1997、ポンチャック・シラット、歴史学・人類学)、ブルース(Brousse, 2000、柔道、歴史学・スポーツ科学)、グローナン(Groenen, 2005、柔道、歴史学)、ドガニス(Doganis, 2006、舞踊・演劇・武道、哲学)、カドー(Cadot, 2006、柔道、日本研究)、ジュステール(Juster, 2007、空手・沖縄、極東研究)、エプロン(Épron, 2008、グーレン[ブルターニュ地方の闘技]、人類学)、ウーゼル(Heuser, 2009、空手、教育学)、ラミレ(Ramirez, 2015、総合格闘技、社会学)、ゴッベ(Gobbé, 2019、合気道、社会学・スポーツ科学)などがある⁸。

書籍に関しては、フランス国立図書館総索引で「arts martiaux (マーシャルアーツ)」の語で

検索して挙示された書籍の書誌情報のうち、2000～2022年の情報はすべて目を通し、それ以前の刊行書籍の情報も相当数を見た。また、すでに閲読した書籍・雑誌論文の文献目録などや、オンライン書店ほかのインターネットからも情報を得た。実践的な入門書や創作物(小説やBD[バンド・デシネ、日本のマンガに近いジャンル]など)は調査対象から外したが、多少とも学術的・専門的な書籍に関しては、太極拳をはじめとした中国武術以外にも、世界各地のマーシャルアーツを対象とするものが増加する傾向がある。とくに、植民地主義／ポスト植民地主義時代からのフランスと海外各地域との繋がりがグローバル化・情報化において変容していくに際し、よくもわるくも、新たなやり方で、それら地域へのフランス側からの関心も拡大しているといえるだろう。

雑誌論文に関しては、国際的な論文検索サイトJSTORや、フランスの同様のサイトPerséeやCairnで、「arts martiaux(マーシャルアーツ)」の語で検索して挙示された論文の情報(1970年代後半～2022年)を得た。また、その他インターネットや、実際に閲覧した書籍に出る文献情報などから情報を得たが、文献探索のやり方を変えれば、より多くの論文の情報を得ることができる可能性がある⁹。

上記の調査の結果からみると、武道に関して出版された学術的な書籍は、多数の研究の蓄積がある英語圏に比べれば、かなり少ない。ただし、実際には、多領域で活発な研究活動があり、以下に記していく。

2. 注目される研究とその位置づけについて

フランスへの武道の伝播については本稿の主題ではないが、「柔道大国」フランスへの柔術・柔道の伝播については、すでにさまざまな調査・考察がある¹⁰。フランス柔道史に関する仏語研究書の記述に拠れば、剣道の最初の紹介についても、講道館柔道の伝播に伴ってのものだとさ

れ、1898年、嘉納治五郎の初めての来仏の際に剣道の初めての「パフォーマンス」が行われたという¹¹。戦後、1970年代以降になつての剣道の本格的な普及については、好村兼一の存在が大きいことは周知の通りである。

1960年代以降のフランスの武道を考える時には、空手家で剣道や中国拳法にも精通する時津賢児の実践やフランス語による著作活動が重要だ。時津は、仏語圏では、武道に関して最も多くかつコンスタントに優れた論考を書き続けている人物といえる。異文化のなかに自らの身体・知性・言語をさらし、「西欧」のそれとは異なる「武道」の身体技法について、思弁的な意見の押しつけではなく、自分自身の具体的・分析的な思考をフランス語で記述しようとし続けてきた時津の言語活動（そうした「分析的」な言語活動は、いわゆる「フランス語の知」の特徴でもあるだろう）は、貴重なものだ。その著作は、当初、1970年代の記号論隆盛の文脈で受容されたともいうが、「武道的身体」の「多次元的な構造」を問題にし、伝書の用語の翻訳にあたって安易な訳語を充てるよりは他のいくつかの語との差異を示す記述を重視する点は、たしかに記号論的な分析を思わせなくもない。だが、記号論の方法論的手続きを踏まえているわけではないし、なにより、彼の文章は、すぐれた「武道的身体」とは何かを究めよう・記述しようという望みを貫くことで、一般化された記号論的図式にはとても収まらない身体多様性・他者性を示し得ている。とりわけ、「間合」「拍子」「読み」「気攻め」などをめぐる身体の特異な「時間性」――弛緩・緊張のくりかえしの中で運動する身体の知覚の「濃淡」「リズム」などの時間性――の考察は、武道の実践者にとってはもちろん、哲学的にも非常に示唆的なものだ。あらかじめ定まった哲学的・観念的な立場からそう書いているのではなく、フランス語という「他者の言語」を通した具体的な思考と記述の結果においてそのような地平が示される

点で、彼の試みは、さらに貴重なものとなっていると言えよう。また、その持続的な著述活動は、1968年（戦後フランスにおいて時代の画期をなす年）以降のフランス現代社会において、その各時期の武道受容を映し出すものでもあるだろう¹²。

なお、フランスでは合気道や空手や柔術が盛んであり、合気道に関しては、一般向けの出版物も非常に多い¹³。また、フランスの武道関連書の著者で、数多い著作活動を続けている人物として、空手家でもあるローラン・アベルセツェールがあげられる。2019年には、すでに版を重ねていた大部の百科事典『極東マーシャルアーツ百科事典』の「最終版」を、ガブリエル・アベルセツェールとの共著として上梓した¹⁴。

最近出版された学術的な著作は多くないし、特筆に値する成果が得られたものばかりとはいいがたい。比較文化学者のフローランス・ブローンスタインには、武道についての著作が複数あり、日本の武士・武芸の歴史を紹介するものや、ジェンダーや身体性の観点から武道における男性中心主義を率直に批判する内容を持つものがある¹⁵。ミシェル・ブルースによるフランス柔道史の著作はこの主題では常に参照される重要なものだろう¹⁶。神学者で空手家のジャン＝ノエル・ブランシェットは、カナダ仏語圏ラヴァル大学に提出した武道の精神性についての博士論文を出版した¹⁷。ごく最近のものとしては、東京在住という哲学研究者カミリ・コロリーにも、日本での合気道の体験をもとに、哲学・思想の文献を参照しつつ随想風に考察した著作がある¹⁸。しかし、このなかにあつて、武道に関する哲学的探究としてとりわけ重要なものが、バジル・ドガニスの『身体的思考――日本の身振り技芸（舞踊・演劇・武道）の試練にさらされた哲学』だ。パリ第8大学に提出された博士論文をもとにし、哲学者アラン・バディウが序文を付したこの本においては、たとえば時津賢児が具体的・技術的に記述していたような「読み」

「気攻め」など武道的身体やその時間性についての考察が、哲学的な探究として本格的に展開されている。そこではベルクソンやドゥルーズの哲学的時間論による「潜在性」の概念が、探究の重要なきっかけになる。時間の中で動かないように見える武道家の身体の思考-行為について、この本の言葉を引けば、「行為は自分自身を消して、そのあらゆる潜在的な力をポリフォニックなやり方で深め、展開している。そして、そのことそのものが、ひとつの行為の様態となる」¹⁹。優れた剣士は、沈黙のまま動かないでいても、多様な強度と動きを孕んだ「潜在性」の状態にあって、どの瞬間にも変化し、思いもかけない行為を顕在化することができる——しかも、そのようにして偶然導出されるかもしれない一度きりの行為には、選ばれない膨大な数の動きが、過ぎ去る持続において、変化しつつも重なり合うようにして潜在的に存在しつつつけている、というのだが、ただ、この本が重要であるのは、ベルクソンやドゥルーズの哲学の適用や説明によってではない。自分自身の身体で「他者の文化」に入り込んで武道や身体芸術を実践しながら、しかも自分の哲学的思考を譲ることなく、さまざまに独創的な概念を提示し、近年の「相関主義批判」(カンタン・メイヤスー)や「新実在論」(マルクス・ガブリエル)の哲学とも異なる、〈新しい〉哲学的地平を開いていることにある。この本についてはまた後で触れる²⁰。

なお、パリの国立東洋語学校(INALCO)などを中心に、日本学または東洋研究(アジア地域研究)の枠組での武道研究・マーシャルアーツ研究が行われてきていることも見ておかねばならない。先にもフランスへの武道の伝播について触れたが、近代における武芸／武道とフランスとの関連では、パリ万博、遣欧使節団、ジャポニスム、日露戦争、第一次世界大戦、ヴェルサイユ会議と国際連盟成立期(仏語圏のスイス・ジュネーヴでは『武士道』で知られる新渡

戸稲造らの日本人が活躍した)、つづく戦間期＝大正期(日本では、他の諸芸道と時を同じくして武芸に関する伝書類の出版がなされ、「武道」の伝統が今につながる形で「創出」されていくとともに、欧州では、オイゲン・ヘリゲルの『弓と禅』など、重要ではあるが「オリエンタリズム」と切り離せない形での新たな受容の展開があった²¹)、ドイツによるフランス占領と第二次世界大戦、戦後の各時期、そして現在は、画期となる時期だろう。フランス(欧州)における「東洋学」や「東洋文化」(「非西欧」文化)受容をめぐっては、エドワード・サイード以来のオリエンタリズム批判や植民地主義批判の問題設定(たとえばポストコロニアルスタディーズにおける)をもとに、英語圏を中心にここ数十年来批判的に考察されてきたことはいうまでもない。ただし、この傾向にもさまざまに批判すべき点はあるし、共通する問題意識を持つとしても、また違った視点も必要だろう。フランスでは、サイードの仕事の本格的評価がだいぶ遅れたことには注意を促しておく。また、フランスでなされてきた／なされうる武道研究の文脈の理解のためにも、すぐれた日本研究・東洋研究の系譜(ベルナール・フランク、アンヌ・チェン、アンリ・コルバン…)に留意することは重要だ。近代人文学におけるヨーロッパの文献学的方法は、さまざまな批判があるなかでも枢要な学問的基礎であり続けているが、フランスの日本研究におけるいくつかの武道関連の博士論文の主査を担当しているのは、コレージュ・ド・フランス教授の仏教研究(円仁・円珍ら日本からの入唐僧の研究が専門)の大家、古代ギリシア・ローマから中国・日本まで東西の文献学に通暁するジャン＝ノエル・ロベールである。フランスの武道受容では『五輪書』は重視され、翻訳も数種あるので、それらを比較検討することは重要な作業となろうが、文献学的方法に基づく武芸・兵法の伝書の本格的な翻訳・校訂は、仏教文献や古典文学や能楽伝書などのそれに比

べて、残念ながらほとんどなされていない。ここでも時津賢児の『五輪書』の翻訳・考察の労作（ロベールの指導による博士論文をもとにして出版された）が、際立ったものと言わねばならない²²。付言しておけば、最近の英仏語圏の武道研究では、日本語地域の実践・文献を対象としているにもかかわらず、日本語を学んで日本語文献を直接参照する意志が全く感じられない論考が非常に多い。おもに英語での翻訳や二次文献ばかりが参照されており、他地域の文化に関わる専門研究としては大きな問題というべきだろう。

また、フランスまたは欧州における、日本文化受容と他の極東文化受容の比較という視点が必要な一方で、逆に、フランスほか欧州内の各国の「日本研究」の地域ごとの差異についても注意しなければならない（ここには、「欧州」とは何か、という根本的な問題もあり、現代の政治・社会・経済の変容もかかわって、各国・各地域の大きな差異、帰属意識と境界の変貌、また「欧州」「西欧」の境界・限界、その「他者」とは何が問われもするところだろう）。世界各地域の日本研究については国際日本文化研究センター（日文研）の刊行物でしばしば調査・報告がなされている。研究者それぞれの論文や論集・報告の語り方をよく見て（とくに「西欧」から）「他文化」を研究する際に、その研究主体自身がどのような語りや視点を持っているか、またそのことへの言及や意識がなされているか（しばしばこの点に無自覚な研究も多い。むしろこのことは自分に跳ね返ってくることはあるが）、なされているとすればどのようなものかを見ておくことは重要となる。

最近の出版物として一般に注目されるものは、2024年のパリオリンピック・パラリンピックの開催を前に、フランス政府から五輪文化予算の助成を得て、2021年から2022年にかけて国立ケ・ブランリ民族学博物館で行われた展覧会図録『アルティメイト・コンバット——アジアの

マーシャルアーツ』だ²³。この展覧会の展示及び図録の各論文は、中国・日本を中心的な対象とし、伝統的な文物・歴史を扱うものもあるが、映画やマンガなど近現代の大衆文化におけるマーシャルアーツの受容に関わるものが多い点が、大きな特徴といえる。そうしたポップカルチャー（ブルース・リーとカンフー映画、時代劇映画から三島由紀夫の写真、マンガやウルトラマンや格闘ゲームにいたるまで）は、「伝統」とされるものの表象（文化外の「他者」による表象であれ、文化内の「自己」による表象であれ）とその現代的な変容を示している。このキュレーションでとくに映画が重視されているのは、フランスにはもともと映画研究の蓄積が多いということも大きい。映画芸術の新しいもののひとつは、エティエンヌ＝ジュール・マレーの実践からわかるように、物体の速度に惹かれ身体の運動を解体・編集して示し、人類にとっての新しい視覚＝知覚を手に入れたことにあるのだから、「カンフー映画」「チャンバラ映画」ほど映画的なものはないともいえ、「マーシャルアーツ」（たとえ映画として撮影されるものが伝統的な実践とどれほど違っていても）と映画の関係は必然と言ってもいいだろう。ただ、この展覧会及び図録論文が上記のような特徴を持つことについては、90年代から英語圏でさかんな「文化研究」の傾向が（その当否はともかく）、フランスでも近年ついに受け入れられてきたという理由が大きいともいえよう。

これに対し、フランスにおける、より専門的・学問的な最近の出版物としては、2023年に、社会科学・人文科学研究のひとつの拠点ともいえるべき社会科学高等研究院（EHESS）から、論集『諸宗教の社会科学アーカイヴ』1-3月号として、特集号「マーシャリティの宗教的・世俗的カテゴリー」が刊行された²⁴。社会人類学・歴史社会学の方法論に基づき、「マーシャリティ（原語のフランス語ではマルシアリテ *martialité*、英 *martiality*）」を、戦争にかかわる原義との関連で

定義したあと（たとえば martial の語と militaire[英 military]の語の文献学的・人類学的な比較検討）、マーシャルアーツをとくに宗教的・社会的観点から考究している。示唆的な序文のほか、インドネシア・日本・中国・インドの事例研究の論文がある。

3. 仏語圏の研究拠点・論集

さて、ここから、仏語圏の武道／マーシャルアーツ一般の学術研究の活動について見るとき、もっとも注目すべきなのは、活発な学会活動や論集発行のための研究拠点が、フランスおよび（欧州ではないが）カナダ仏語圏に存在することだ。フランスには学会組織「コンバットスポーツ・マーシャルアーツ研究考察協会」（略称 ARRESCAM）があり、この学会主催の国際大会「コンバットスポーツ・マーシャルアーツ研究考察大会」（略称 JORRESCAM）が、1991 年からほぼ2年ごとにフランス各地の大学で行われ、その成果は開催の数年後に論集として発行されている²⁵。スポーツ科学、医学、生理学から教育学、人類学、社会学、哲学、精神分析に至るまで、多分野の研究者・実践家・愛好家が発表できる学会発表のほうは玉石混淆の感も否めないが、論集には研究者による多分野の堅実な論考も多い。ここでも恣意的な選択になることは避けがたいが、これまで活動の中心となってきた研究者や執筆の目立つ研究者について、研究者名・マーシャルアーツ分野（この点は明確ではない）・研究領域を記しておけば、クレミュー（Crémieux, 空手、スポーツ科学）、フーケ（Fouquet, 剣道、哲学・スポーツ科学）、テリス（Terrise, 空手、ラカン派精神分析・教育学）、最近ではエプロン（Épron, グーレン、スポーツ人類学）、ゴダン（Gaudin, 東アフリカ闘技、東アフリカ研究）、ウーゼル（Heuser, 空手、教育学）、グローナン（Groenen, 柔道、歴史学）、ラミレ（Ramirez, 総合格闘技、社会学・メディア論）、ゴッベ（Gobbé, 合気道、社会学）といっ

た人々である。フランス以外からも参加者を募って、さまざまな観点が提示されている点は、内外の諸地域や社会集団に立脚しつつ「普遍性」をめざす「フランス語の知」の力が、まだ一応は維持されようとしていることを示すといえようか。

また、北米カナダ・ケベック州（仏語圏）のラヴァル大学では、社会学者オリヴィエ・ベルナールが、ここ10年近く、カナダだけでなく他国・多分野（人文・社会科学）からのさまざまな執筆者の論文を集めた論集シリーズ「マーシャルアーツの社会的宇宙」を陸続と出版しており、情報メディアを通してのマーシャルアーツの実践、マーシャルアーツにおけるヴァルネラビリティ（傷つきやすさ）の問題、宗教とマーシャルアーツなど、今日的な問題を取りあげている²⁶。

これら2つの研究拠点の論集においては、日本地域由来の「武道」についても、参加者のさまざまな論点が示されている。過去から現在までの歴史や現状の探究にとどまらず、現在から未来に向けての考察の多様性があり、仏語圏の武道／マーシャルアーツ研究として、重要なものだろう。とくに、オリヴィエ・ベルナール編集の論集では、カナダ仏語圏ケベックの地域性を重視する面もある一方、上記フランスの学会（ARRESCAM）に属しているようなフランスの研究者との関係が強く、さらには、すぐあとで触れる「マーシャルアーツスタディーズ」をはじめとした英語圏の研究動向にも目配りがなされてきた。英仏語圏の研究の橋渡しにもなっている点で、このカナダ仏語圏の論集は重要な位置に立っている。先に述べたように「研究現状報告」には参考文献目録の作成が重要だが、この論集シリーズは各論文の文献目録も充実しており、仏語圏の重要な書目を知るため助けになる。カナダ仏語圏のものではあるが、欧州の研究現状を調べるために欠かせないものだ。いずれにしても、国際的なマーシャルアーツ研究

は、英語圏・仏語圏のほか、国境を横断しながら展開がなされている。日本語地域由来の「武道」は今のところまだ重要な位置を占めてはいるが、これら仏語圏の研究拠点の論集だけを見ても、研究対象は人類学的な広がりを見せており、多様である。日本にも寒川哲夫の優れた研究を中心としたスポーツ人類学の立場からの武道／マーシャルアーツ研究があるが、このような横断的な場では、日本のものを対象とするのであれフランス（たとえばブルターニュ地方）のものを対象とするのであれ、すでにそのような世界的な広がりの中で捉えられていることが重要だろう。

こう見てくれば、英語圏の武道研究の現状にもわずかながら触れておく必要がある。仏語圏に比べ圧倒的に多数の研究の蓄積があるなかで、アレクサンダー・ベネットの広く深い日本武道紹介・研究に関する著作や活動、さらに、イギリス・レスター大学（ノルベルト・エリアス以来のスポーツ社会学の「レスター学派」の研究拠点）提出の博士論文をもとにしたラウル・サンチェス・ガルシア『日本武道の歴史社会学』（2019）は、近年の注目すべき成果だろう²⁷。参考文献目録作成の観点でいえば、英語圏を中心とした武道研究の文献目録としては、古典的なものから最新のものまでを示すサンチェス・ガルシアの著作は非常に参考になる。また、2015年には、カルチュラルスタディーズ研究者のポール・ボウマンらを中心に、ウェールズのカーディフ大学を拠点として「マーシャルアーツスタディーズ」学会が創立され、学会誌『マーシャルアーツスタディーズ』がインターネット上で全文公開されている²⁸。同学会は、近年、南仏のマルセイユ（2020年）や、スイス仏語圏でオリンピック委員会の所在地でもあるローザンヌ（2022年）で国際大会を開催しており、仏語圏の武道研究にも影響がある。日本の武道研究では、ジェンダーやセクシュアリティ、武道受容とオリエンタリズムやコロニアリズムと近代化

の歴史、映画・マンガ・インターネット動画などの「大衆文化」、前衛芸術の身体論との比較、現在・未来の技術革新といったアクチュアルでクリティカルな問題（政治的・社会的な現在への鋭い批判に関わるという意味での）は、比較的提升げられることが少ないが、そうした現代的な問題に積極的に取り組む姿勢が、英語圏・仏語圏の研究にはしばしば見られる。上記の『マーシャルアーツスタディーズ』誌でも、いわゆるカルチュラルスタディーズの方法論によって、そのような論点を取り上げられている――批判すべき点もさまざまにあるとしても。たとえば、この雑誌の編集責任者ポール・ボウマンの論稿「マーシャルアーツ(スタディーズ)を(脱)構築する」は上記ラヴァル大学の論集でも仏訳が掲載されているが、いわゆる「フレンチ・セオリー」の図式的な理解などには、率直に言って大いに問題があるといわざるをえない²⁹。また、これも仏語圏から離れるが、武道／マーシャルアーツに関する国際的な学会や論集としては、ポーランドを拠点とする「国際コンバットスポーツ・マーシャルアーツ科学学会」（International Martial Arts and Combat Sports Scientific Society, IMACSSS）また論集「武道論集」（Archive of Budo）がある。日本武道学会との関係から、日本でも言及されることが多く、日本からの参加者も少なくない。

さて、仏語圏・英語圏の直近の動向のなかでとくに注意すべきこととしては、フランスの学会「コンバットスポーツ・マーシャルアーツ研究考察協会」（ARRESCAM）の2023年の大会が、2024年のパリオリンピック・パラリンピックを前に、これまでで最大の規模で、仏語・英語・スペイン語を使用言語とし、英語圏「マーシャルアーツスタディーズ」学会との共同開催で行われたことだろう³⁰。公開されたプログラム（題目と短文の概要のみ掲載）をインターネットで閲覧し、日本語地域からの参加者も確認したが、それぞれ興味深いテーマであるものの、

その人数はごくわずかだった。実際、マーシャルアーツ受容の多様化のなかでも、日本の武道は今のところは重要な位置を占めているとはいえ、上記の仏語圏の国際学会や論集にかんするかぎり、日本人研究者の参加は少ない。英語圏の『マーシャルアーツスタディーズ』では第6号（2018年6月）で「日本のマーシャルアーツの新研究」特集が組まれ、日本からの研究者として中嶋哲也や坂上康博らの論文が掲載されたが、これは例外的な事態といってよく、その後、日本の研究者から持続的な寄稿がなされているわけではない（ブルース・リーの映画など表象研究にも重きが置かれたこの雑誌では、「日本武道」よりも「中国武術」を主題とした論文が多い）³¹。国際社会・情報化社会が決定的な変動期を迎え、国際的なマーシャルアーツ／武道の研究も近年（とくに2010年代後半以降）上記のように多様に展開しつつある現在を見れば、日本の武道研究は、すでに世界に置き去りにされつつあるともいえる。

II 武道の国際化の現在と未来

1. 国際化する武道の最新研究動向——精神的・身体的「危機」、さらにそれを越えて

以上を踏まえて、仏語圏の最新の研究動向について考えてみよう。先述の通り、2023年のパリの社会科学高等研究院（EHESS）の論集のマーシャルアーツ特集は「マーシャリティの宗教的・世俗的カテゴリー」だったが、2022年のカナダ仏語圏ラヴァル大学の論集は『マーシャルアーツ——宗教的なものと儀礼について』³²と題されており、また、やはり2022年の英国ウェールズ『マーシャルアーツスタディーズ』誌の特集号は「マーシャリティと宗教が会うところ」³³だった。国際的な場での「武道についての問い」——たとえば、シンプルで原理的な問いとして「武道とは何か」「武道とスポーツはどう

違うのか」「なぜ戦いの技を学ぶのか」——に際会した時、伝統、文化性、精神性に関連した解答はすぐに口にされてしまうものであるし、伝統的精神性の問題が「宗教」に接近することは、ごく一般的な連想の限りでは想像されやすいところだ。そして、2010年代後半以降のイスラム原理主義組織によるテロ統発などの世界情勢は宗教への関心を喚起しつつあり、この文脈でフランスに関して言えば、フランスが「政教分離（ライシテ）」の「共和国」である以上、宗教性は今すぐれて敏感な問題（たとえばイスラムフォビアや、反ユダヤ主義とその批判の広がりなどに見られるような）となっている。3つの論集がほぼ同時期に「宗教」を対象としていることは、英仏語圏で近年さらに研究者間の交流が強まりつつあることのほかに、上のような文脈とも無縁ではないだろう。

社会科学高等研究院（EHESS）の論集の序文の前半は、デュメジル、モースからクラストル、デスコラに至る仏語圏の人類学的知見を提示し、「平和」のなかで宗教的儀礼（遊戯・技芸に広げて考えることもできよう）に形を変えた「戦争」「マーシャリティ」がどのように社会に残存するかを多様な事例をあげつつ記述している点で、立論の意図を離れても示唆的である。ただ、デュルケーム宗教社会学の「カテゴリー」概念から始まる理論展開で、マーシャリティが通過儀礼から「戦争宗教」に移行することを指摘し、近代に至ってのナショナリズムとマーシャルアーツの結びつきを歴史社会的に通覧する序文後半部は、一般的に過ぎる感を否めない。だが、序文の結語で、転換期にある「現在」の戦争と「マーシャリティ」に関して述べられていることは、ここでも、それなりに示唆的である。

一方では、「宗教」が問題とされる昨今の紛争のなかで、じつはまったく非宗教的なPMC（民間軍事会社）がグローバル経済の商品として国家の軍隊に寄生・競合していること³⁴、他方では、戦争とは直接関係ない「マーシャリティ」とし

て、やはり固有の宗教性・文化性を離れて国際的にスペクタクル化された産業ともなったMMA（総合格闘技。しかし、後述するように新たな「宗教性」の観点からも論じうる。また、ジェンダー論・メディア論の観点や各国の軍事訓練に取り入れられている点からも興味深い、高度な身体実践である）があること。その間にあって、「伝統的」なマーシャルアーツは、政治とも宗教とも結びつきを失った「文化財」としてのみ残されていくのかもしれないということ。

この図式は（総括的整理であるから仕方ないにせよ）国際化する多様な地域での個々の具体的実践がやや軽視されているのではないかということを除けば、武道／マーシャルアーツの現在と未来を考える際に、立論の意図を離れても一考に値するものだろう³⁵。この論集所載の日本に関する事例研究は、植芝盛平の合気道についての論文である。個別の視点にとどまる限りでは「盲点」「死角」となる問題が、社会学的方法では明らかにできるという論集序文の後半部にも沿った論考で、さまざまな諸点を考察しているわけだが、序文にも見られる一般化の問題がここにもあるように思われる。ひとつだけ指摘すれば、この論文は、植芝盛平の合気道と大本教の関係を詳細に紹介し、「武道」が国家主義・軍国主義において果たす役割を批判的に論断しているが、そこに現れる「力学」のなかで、大本教が国家によって徹底的に弾圧されたことや、また大本教における出口なおの存在については全く言われていない（合気道における女性の役割が言及されないことも含めて）。これについては、先行研究を踏まえての議論の文脈があるだろうし、ないものねだりというべきかも知れないが、国家・権力と個別的な個人や集団が接触するダイナミズムや、ジェンダー／セクシュアリティの問題も孕む個の実践を考えるために、やや残念である。この論文では、「人民的な解放の力学」における「政治的霊性／精神性」（「霊性／精神性」の語は英 spirituality、仏

spiritualité）³⁶という、哲学者ミシェル・フーコーの語が（詳しい説明はないものの）引用されているだけに、なおさらそう思われるところである。この哲学者が、安易な一般化には到底収まらない、権力と個が接触する際の両義性についての考察から、（とりわけ性的身体としての）個の「主体化」や、それをめぐる「生-政治」「統治性」を考究し、さらにはイラン革命の（神秘主義的ともいえる）「政治的霊性」を論じるにすらいったことは、よく知られている。また、この論文でもその名が引かれているが、同じ論集の別の研究の冒頭では社会学者ピエール・ブルデューの「支配的・被支配的ポジション」³⁷の語を含む引用が掲げられている。現代フランスの社会学でもっとも影響力をもったブルデューについても、その「批判社会学」をめぐっては、権力関係におかれた個の「実践」を、どのように具体的な（「ミクロ」な）相で捉えるかが、これまで大きな議論となってきたはずだ。

他方、仏語圏の研究としてラヴァル大学の論集『マーシャルアーツ―宗教的なものと儀礼について』を見ると、このシリーズの掉尾として英仏語の論考を数多く集めたというだけあって、シリーズ中でも最も多彩で興味深い論考が並んでいる。たとえば、フランスの学会（ARRESCAM）の論集にも執筆しているフランス人社会学者クリストフ・ゴッベの論文「合気武道―神なき神秘主義」は、パリの「合気武道」の道場（フランスの高名な合気道師範の道場）での稽古の描写にはじまる長大な論文で、道場の「儀礼」の様態を詳細に分析している。だが、この論文は実は、この日本の武道の「精神性」を社会構築主義の観点から脱神秘化しようとするもので、別なところで自らの経験を（武道からの）「転向」とも呼んでいるゴッベは、この「合気武道」の「精神性」「宗教性」に潜むさまざまな虚偽や問題や矛盾を示していく。その細部の（また総体の）議論の当否はここでは措くとしても、彼の論文は社会学的・人類学的知

見に抛り、個人の実践にもとづく参与観察の事例研究となっている。「マーシャルアーツ[武道]は何の役に立つのか」「マーシャルアーツ[武道]の目的はなにか」というシンプルな疑問について、研究対象となった道場の師範は、「武」の字を含みつつ「平和」の構築をめざすのだ、と述べるのだが、「極東の宗教的・哲学的伝統と関連づけられたエキゾチシズム」³⁸でしかないこうした「粉飾」的回答についての、この論文の問いかけは厳しい。この論文の追究は、いささか個人史的にすぎる面も含むが、しかし異文化体験においてしばしば見られる幻滅や精神的・身体的ヴァルネラビリティ（傷つきやすさ）、その「ケア」の問題にも通じ、「武道の国際化」を望む者なら無視できない「応答責任」に関わる問いといえよう。

ただ、「神秘主義」といっても、思想史的に見れば（たとえばキリスト教のそれであれイスラームのそれであれ）この語はとくにネガティブな含意を持つものではないことは指摘しておきたい。16世紀のカトリック神秘主義者でイエズス会の創設者として知られるイグナチオ・デ・ロヨラの『靈操』（直訳すれば「精神的〔靈的〕訓練」）は、神秘主義的瞑想の精神的・身体的な規律訓練の諸階梯を記した宗教史上の重要文献であり、元軍人でもあった宗教家のこの著作には、軍事的な身体操練の規律性の影響が見られる³⁹。『靈操』のそうした面は特殊な例としても、神秘家の身体の問題は思想史上の大きなテーマといってよいものだろう⁴⁰。ここで身体論についていえば、デカルト以来の西欧の心身論といっても、（18世紀までに限ってもマルブランシュ、スピノザ、コンディヤック、ディドロらの名がただちに想起されるように）単純に一般化された「心身二元論」に収まるものではない⁴¹。この論集にはマーシャルアーツの「精神性」について現象学的検討を行うとする論文もあるが⁴²、心身論、さらには身体論をめぐる、たしかに近代以降、とりわけ20世紀の哲学や芸術にお

いて、「身体」への新たな関心の拡大が顕著となることは確かである。フランス現代哲学における（「構造主義」以降の思想と並んで）一方の極ともいえるべき「現象学」の観点からの身体論、とりわけメルロ＝ポンティのそれはよく知られている。武道／マーシャルアーツの「身体性」「精神性」をめぐる、現象学に言及する研究は、仏語圏でもしばしば目につく。ラヴァル大学のシリーズの別の論集（2020年）にも、「マーシャルアーツ——哲学的パースペクティブ」⁴³と題する論文があり、日本の武道について、メルロ＝ポンティほか、フッサールやハイデガーの現象学に影響を受けた日本の哲学者たちとして、西田幾多郎、和辻哲郎が引かれ、西田の「場所」や和辻の「風土」の概念にもとづく議論が行われている⁴⁴。しかし、そうした現象学的な議論から武道の「身体の技法」における「調和」または「平和化」という意義づけを導く結論は、それ自体予定調和的なもので、にわかには首肯しがたい面がある。武道について現象学というのであれば、メルロ＝ポンティの場合でも、より実践的な領域に関わる探究の方が重要ではないか。ここでは、そうした探究を引き継ぐ仏語圏の現象学者のひとりマルク・リシールの病理現象学の研究が、たとえば、障がい者武道の実践におけるディスアビリティからの「回復」についての考察に「哲学的基盤」を与えてくれるかもしれない——このことをとくに付言しておこう⁴⁵。

ともかく、こうして見てくると、仏語圏の最も新しい研究動向としては、武道の「精神性」をめぐる強い関心や鋭い論争的文脈が見て取れよう。さきに、社会科学高等研究院（E H E S S）のマーシャルアーツ論集について、社会学的一般化が過ぎるのではないかと指摘したが、この点については、各論者の意図を越えて、「精神性〔靈性〕」「宗教性」「身体性」について敏感な最近の社会的・政治的情勢（グローバル経済・情報化社会のなかでの、宗教が問題とな

っていると「される」テロまたは戦争での身体的・精神的暴力から、とくにジェンダー的・性的身体をめぐる多様性やヴァルネラビリティにかかわる「アイデンティティ」の承認闘争にいたるまで)、そして、そのうえでの論争的文脈がここにあることをよく考えれば、一般的論断がされてしまうことにもより深い理解ができるかもしれない。たとえば、今日、ジェンダーマイノリティの解放とその観点での競技やアートの枠組みの問い直しは、重大な議論を呼ぶ主題となっているが、とりわけ武道に関しては、この主題は、競技への参加の問題のみならず、伝統的な文化性が問われるだけにいっそう重要なものだ。つまり、現在の世界では、多くの人々が身体的・精神的に敏感にならざるを得ないアクチュアルで普遍的な「危機」と「変容」が現前しているのであり、このような状況は、武道の国際化をめぐる応答・対話を望む側にも、相応の準備が不可欠であることを求めている。

さらにいえば、武道／マーシャルアーツの身体性・精神性の変容は、より大規模な・世界的なやり方ですでに進展しているともいえる。ラヴァル大学のこの論集の複数の論文は（これについてはおもに英語圏からの論文掲載ではあるが）、宗教のテーマをきっかけとしていくつかの興味深い事実を示してくれている。たとえばブラジリアン柔術や MMA（総合格闘技）が国際競技としてスペクタクル化するなかで、宗教的なシンボリズム（南米の新ペンテコステ派キリスト教の例がとりあげられる）が、十字架や磔刑の彫像・画像だけでなく、試合前後の身振りや、身体に刻み込まれるタトゥーのような形で氾濫していること⁴⁶。ここでは、「戦う身体」そのものの上に精神性・宗教性が書きこまれ、宗派（宗教右派）の団体によって認められ、身体が群衆の熱狂的な視線の対象となることで、信仰を広める役割が期待されてもいる。また、リオの郊外では都市の暴力の拡大のなかで、強い身体のためのブラジリアン柔術の身体的訓練と、

福音派キリスト教の原理主義的布教が、融合するような事例が見られること⁴⁷。あるいは、トルコの国技として知られるオイル・レスリング（ヤール・ギレシ）が、政治・社会状況の変化とグローバル経済・情報化の中で、近代トルコの世俗的ナショナリズムだけでなく、イスラームの格闘技として意味づけられる言説が強化されたり、またはペルシアや中央アジアや地中海を横断する（「アジア横断的」な）文化的記憶とともにさかんに語られるようになっていること⁴⁸。これらの諸事例には、いうまでもなく「伝統の創出」の現象があるのだが、近代までのそれとは違い、たんなるナショナリズムというより、グローバル経済やインターネットの視覚的メディアによる情報化に深くかかわって、世界で同時多発的に進行し、場合によっては宗教上の原理主義とも関係をもっている。また一方で、ヨガのように健康術としていったんは元来の文化性から一定の隔たりをもって発展してきたものが、論考の対象となる或る団体の場合のように、さまざまな文化性・精神性・身体性と（とくに日本の武道と）雑種的に複合させられ、左派的な社会変革の希望と右派的なグローバル市場への期待が綯い交ぜになって、インターネット上でたぐみなメディア化を図り国際的な展開を企てているという、イタリアの事例⁴⁹。このような雑種の・多元的・カオス的ともいえる諸現象は、過大視するべきではないかもしれないし、ある条件（世界経済の変化など）において沈滞してしまうものかもしれない。俯瞰的な見方であえて言えば、普遍的な準拠枠を欠いて、いわばある種の欲動のまま氾濫するかのように見えるこうした事例のすべてが、本当に「宗教」的といえるのかにも疑問符がつく。ただ、グローバリゼーションの画一化と相俟って進行しているこうした多極的・雑種的事態は、個々の事例として尊重されるべき、きわめて興味深いものである一方、脆弱性を抱えたままとめどもなく何かに押し流されていくような恐ろしさもある。

2. 多様体としての身体——「芸術」としての武道

さきにも触れたように、バジル・ドガニスは、武道的身体の「潜在性」について論じながら、優れた武道実践者の身体の変化する動き（または動かなさ）の複雑さや精細さを指摘し、そのような身体に「多様体としての身体 le corps multiple」⁵⁰を見出す。ここでいう多様体とは数学用語でもあり、哲学的には、さまざまな関係が構造的に対応しつつ変換する（位相幾何学でいわれる位相の変換は、その記述が非常に高度なものでありうる）総体を意味しているとされる。武道の実践者がそんな複雑な思考ができる特別な存在というのではなく、伝統の記憶に基づく稽古を経た実践者が示す特異な動きには、個体に潜在する、精細で複雑な「多様体」というべきものの現れが見て取れる、というのである。多元的な・精細なやり方で判断・決定され変化していく諸関係が、この身体には（脳を含んで、その外の場と繋がって）あって、そのような潜在的な諸関係が変化させられつつ・みずから変化する様態を、ドガニスは「身体の思考」と呼ぶ。意識的・主体的な私が思考するのではなく、「多様体としての身体」（そこには、無意識や神経的・言語的中枢としての脳も含まれる）が、とりあえず私という名をもつものにおいて、思考する。このような非常に大胆な考え方から、ドガニスは、武道を前衛的な身体芸術と関連づけて考察を進めていく。アントナン・アルトールのそれに代表されるような20世紀西欧の前衛的身体芸術がめざしたのは、何か伝えたいことを表象するというよりも、上述の「多様体」といってもいいような、通常は見えない力、潜在的な身体と思考の力を目の当たりに現れさせることだった。ドガニスは、暗黒舞踏の大野一雄が、死んだ妹の身体を目の前に再現しようとする強迫的・痙攣的な身振りや、同じく舞踏家の室伏鴻が、「体の軸を外部に移す」身体的試みから、ほとんど死んでいるような身体のありよう

をくりかえし提示すること（そこでは沈黙や静止をしていることが重要な効果を持つ）に、「多様体としての身体」の、重要なあり方を見る。これらは、武道の身体を考える上では、あまりにも前衛的・秘教的で、理解困難な実践というべきだろうか。ただ、「多様体」といっても、個々の身体には、死や性的差異といった限界があるし、だからこそ、そうした限界を鋭く引き受ける個々の身体を、入れ替え可能な項としてのみではなく特異な「個体化」の相においてみることができ⁵¹。アルトールも、死や傷や苦痛や狂気、身体とともにある「思考の腐蝕」「思考の不可能性」の葛藤について繰り返し記した書き手でもあった。このことへのドガニスの認識は、彼の論の展開が、一般的に理解された限りでのベルクソンの「生の哲学」から離れていくことにも関わっている。ベルクソン哲学の特徴のひとつは、フランス語の言葉に即した思考の明晰さだが、ベルクソンの意図を離れたところで大きな影響を受けた者たちが、ともすると、特定の言語文化や伝統のなかでの「生の跳躍」を重視して国家主義に接近したことは知られており、この傾向は第一次世界大戦前のフランスの主意主義的な軍事思想に影響を与えたともされる。ドガニスの試みは、そのような一般化された「生の哲学」をもとに武道を論じて「日本精神」に接近するようなやり方とはたしかに異なるものだろう⁵²。彼の本の特長は、自分の属してきた文化とは異なる日本地域の文化に「没入」し、自らその文化の身体実践を体験し、うえに見た舞踏や武道におけるような特異な身体を、さまざまに他者の影響を受けつつも自らの思考（フランス語の哲学の言葉による）を譲らず、考察していくことにある。

ドガニスからは離れて、ここで、アルトール以降の西欧の身体芸術の実践者として、ウィリアム・フォーサイスの名をあげておこう。フォーサイスはアメリカのコンテンポラリーダンス振付師だが、フランスでの公演も多く、仏語圏の

身体芸術への影響も大きい。彼のダンス振付では、身体の身振りのさまざまなあり方をコンピューターでパターン化・プログラム化して組み合わせていくという演出が 80～90 年代から行われていて、「多様体としての身体」の観点から興味深い。じつは、このようなパターン化の方法論は、1930 年代のオーストリア＝ハンガリーの表現主義舞踊家ルドルフ・フォン・ラバンの「多面体」「正二十面体」として幾何学化された重心の身体理論に由来している⁵³。ある重心に対していくつかの姿勢が、ある姿勢に対していくつかの身ぶりが…、という多様な「組み合わせ」によって幾何学的に定式化されていく身体理論は、知られていなかった身体の動きの可能性を発見させるものだろうし、大きな広がりをもった構造的転換の総体においてみる点で、先ほどのアルトーや暗黒舞踏とは一見まったく違ったアプローチに見えながらも、身体科学の運動論をこえた美学的・哲学的射程があり、「多様性としての身体」の探究と呼ぶこともできるものだろう。複数の「重心」を考慮する考え方は、時津やドガニスが異文化間で武道の身体的実践を検討する際に重視する「重心」「軸」「中心」の問題化にもつながっている。とはいえ、フォーサイスやラバンの試みは、身体実践の現場において、あまりにも知的に過ぎる理論化というべきだろうか。ここで興味深いのは、現在に至るまで欧米のコンテンポラリーダンスをリードし続けてきたフォーサイスが、日本の武道に関心を持ち、武道家の日野晃を欧州公演に招いて帯同し、彼の実践を自らのダンス振付に取り入れてもいる、という事実だ⁵⁴。その検討はここでは省くが、これは、西欧的な芸術的身体への「武道」からの応答・対話の試みということではできよう。

3. 武道の現在と未来へ向けて――武道と「未来学」

新しい比較や他の身体技法との対話・応答関係によって武道の身体性を考える、「多様な身体」の変化を新たに見るというのはしかし、こうした前衛芸術だけでなく、例えば日本の過去のさまざまな芸道の考察によっても可能なことだろう⁵⁵、現在・未来の技術革新との関係でも起こることだろう。多様体という概念は、対応関係を変換する要素や組み合わせによって、その構造が思いもかけないやりかたで変化するということも意味するというのだから。新しい技術や組み合わせが、それまでの構造の総体（ある個体と、集団・社会・自然などとの多様な関係）を予見できない形で変換してしまうということはいつでも起こりうる。

たとえば、広くスポーツの身体に関わる領域でも（競技とそのための練習においても、あるいは、競技での勝敗を離れた、自分の身体のさまざまなあり方を再発見させてくれるような実践においても⁵⁶）、AI や身体テクノロジーの技術革新が変化させる未来――たとえば、「拡張身体」「拡張現実」の未来――ということがある。また、「もののインターネット」やヴァーチャリアリティ、ナノテクノロジーなどによる生体工学などを利用して、地球の裏側からでも瞬時の身体的知覚または AI の自動的対応で、超小型ドローンなどを用いた破壊を行うことができるといった軍事技術の発展は、戦争や「マーシャリティ」にかかわる認識や言説も変えていくものかもしれない。第二次世界大戦前の軍部の武道利用については、中嶋哲也によるアジア・太平洋戦争中の軍部の「武道の戦技化」⁵⁷の主張の調査は、全体主義の総力戦体制がつくりあげられていく過程を、ミクロなレベルでの或る人物の言表の形でまざまざと示してくれる（ここでは「日本精神」に繋がる形で言われるような武道の「精神性」さえも、いまや不要なものとして排除される）。そこで示されていることは、

今後ありうるかもしれない軍事と武道／マーシャルアーツのかかわりを考える際にも、参考になるのではないか。だが、過去と大きく異なり、情報技術・生命科学の発展が、身体に関する新しく多様な発見の可能性を示すとともに、国家的な——さらに国家的な権力と競合・協力してグローバルな——ネットワークの中での個々の生体へのマイクロレベルでの管理・チェックをも可能にしている現在、一般に、武道の「身体」や武道／マーシャルアーツをめぐる言説・言語がどのようなものになっていくのかは、もちろんはっきりと見えてはいない。

資本主義と国家、経済リベラリズムと多文化主義の新しい動きの中で、ひとりひとりの個や少数派の集団は、全体としてみると、ともすれば状況に押し流されてゆくだけのようにも見える。そのような個は、どのような者であれ、何らかの形で「汚名」に塗れた状況に陥ってしまう可能性もある。前章で名の出たミシェル・フーコーは歴史的文書の探索のなかで、犯罪者や「両性具有者」の、時代の権力的な布置におかれて「汚名」のなかに忘れられるままにとどまっていた匿名のひとびとの言葉の、注目すべき特異さを見出そうとしたが⁵⁸、アルトーもまた、精神病院に収容されるような状況のなかからでも、特異な身体的・言語的实践を後世に残した存在だった。たとえば、幕末や戦後の転換期を生きた武道の実践者のなかにも、アルトーを思わせるような特異な例がないだろうか。準坳枰が揺らぐ世界において、一方ではさまざまな個人によるアイデンティティの承認を求める闘争がなされ、また他方では、抗いがたくそうした個人そのものを組み込んでいくような経済的・政治的・技術的な巨大な動きがあるなかで、社会的にも学問的にも、既成の言説や現実の大きな組みかえにおいて、議論すること自体にさえ困難が出てくるような、さまざまな事態が予想される。そうしたなかで、固定したアイデンティティの承認というのではなく、特異で個別

的なものが示す普遍性について考えることができるかどうか。

ドガニス、平和な時代（江戸時代）の武芸を非本来的なものとしてとらえる一般的な見方に対し、戦争は、マーシャルな技術をもっぱら別なことに役立たせるものだから、功利的であって、むしろ平和な時代にこそ「武芸」が「武芸」として純粋に成り立つ契機があるという意味のことを述べている⁵⁹。遊戯または技芸・芸術としての「マーシャリティ」というわけだ。もちろん、そのような遊戯・技芸としての武芸は、当時であって功利的な「商品」でもあっただろうが、遊戯には遊戯としての自律的な次元もあるだろう（たんなる遊びの楽しさということもこえて、ひとは苦痛を覚えても遊戯や技芸をきわめようとすることがある）。ホイジンガやカイヨワが言うように、遊戯が聖性や精神性・宗教性と結びつくとすれば、それは、遊戯が、性や死といった限界に接近する問題にかかわっているからだろう。舞踏家や武道家の身体を考察しつつドガニスと言う、「身体的思考」「潜在的な思考の形式」⁶⁰がそうであったように。しかし、ドガニス（「内在性」の哲学者として）言うところ、そこで「宗教性」、または「文化」としての宗教性を必ず問題にしなければならないということはないのではないか。死や苦痛といった限定とともに（しかし死を特権化したり、死へ向かう行動を肯定したりすることはせず）変化しつづける身体を、「多様体としての身体」と呼ぶとすれば、戦いに起源をもつ武芸（武道）の身体はまさにそうだろうし、純粋な技芸・芸術に近づく武芸（武道）は、身体の多様な変化を否定し・身体を「功利主義」的に別な目的（戦争など）に利用しようとするものに対し、逆説的な緊張関係において抗するものかもしれない。そうしたこともドガニスの論考から示唆されうる（この点については、上述のフランスの社会科学高等研究院の論集の「序文」で触れられて

いたピエール・クラストル以降の政治人類学的考察も参考になる⁶¹⁾。

ここで、仏語圏ではないけれども欧州の事例に関する日本側の研究（酒井利信・阿部哲史・二宮恭子・堀川峻による、ユーゴ紛争経験者の武道体験についての、詳細な記録研究）は興味深い⁶²⁾。これは、現在と未来に関わる武道研究の成果として非常に重要なものといえるだろう。ユーゴ紛争は、さきに述べた冷戦崩壊後から今日に至る現代史のなかでも、西欧の歴史上の参照点となるような戦争だった。冷戦からの時代の転換点に起こり、民族・宗教・植民地主義といった問題、とりわけ、現在と未来を変えてしまう新しく破滅的なやり方でいま行われている大量虐殺や「戦争の遍在化」を遠く予告する問題がそこに見て取れるし、西欧中心主義の今後というものの致命的に問われた事件であって、今日、これからの世界を考えるためにも重大なものだ。また、数多くの難民――強制的に移動させられる、多様な人々の集団――が発生し、それへの対応が問われた紛争でもあった（このとき国際法上は超法規的な決断をして国内避難民救援に介入したのが、当時の国連難民高等弁務官・緒方貞子だった）。

この研究は、紛争に参加した旧ユーゴ軍人が、のちに武道（剣道）を学んでの経験や、そこから見て事後的に紛争当時の経験を語る匿名の言葉の、年数を挟んで複数回行われた、正確さが期待できる慎重な聴き取りの記録であることによって、重要である。くりかえし苦痛や逡巡を述べ、回顧的な意味づけを行う証言は、証言者の主観や研究者たちの考察をも越えて、戦争――これからの未来を照らし出してもいる戦争――と武道とに関わった身体をもつ個について知ることのできる、ひとつの貴重な事例として残されている。

結語

たまたまフランスの武道研究から調査を始めたが、フランス語がオリンピック公用語として重要なことを別としても、「フランス語の知」は（伝統的なものであれ、現代的なものであれ）、武道研究においても、英語圏の（「グローバリゼーション」の）それに対抗して普遍性を志向する独自の力を、まだ失ってはいない（それ自体、残存し強化される「西欧中心主義」との関連で批判さるべき点はあるとしても）。少なくとも、そうした普遍性を自らの特殊性として主張する知の発信を、一方で確かに存在する多極化の潮流もふまえて、いまだ続けようとしてはいるわけだ。

国際的な武道研究や武道についての問いかけ（ここでは仏語圏を中心とする欧州を問題としているが、沖縄・台湾・朝鮮半島・モンゴル・ベトナム・中国などの極東地域はいうまでもなく、さまざまに重要な他の地域があることは自明だ）を知り、対話を続けていくなかでは、今後、これまでの日本の武道研究の見直しも図られていく必要がある。他者との差異に触れ普遍性へと向かうことは、出会いと対話の中で自分がたえず変化することも意味する。しかし、新しい状況に振り回されるのではなく、なんらかの原則は重要だ。日本語での武道研究は、故・中林信二による研究が大きな画期をなす。逆説的だが、新しい国際的変貌の時代において、「中林信二に還る」ことは重要と思われる。むしろ、彼の主張や成果を金科玉条のように受け継ぐのではなく、彼の遺したテクストを読み換え、その可能性を新しい状況で再創造していくことが必要だろう。ノルベルト・エリアスは、スポーツを「暴力の抑制」の観点から考察したが⁶³⁾、これは社会学的観点を離れて思想的・哲学的に深く探究できる問題でもある。とりわけ、武道とは、他者と向き合って「暴力」「生死」といった現実身体的・精神的・知的に直面し、どのようにそれに対して距離を取り、どのように個

体化・主体化がなされ、さらにはどのように他者や外部（社会、自然）との関係がつくられるか、という問題が問われるものだろう。中林信二の探究には、つねにそのような問題設定があった。たとえば、彼のいう、形而上学的・哲学的な武道研究の背後には、それとともに、通常の道徳を越えた限界的な場での倫理の追究があると思われる⁶⁴。

さて、日本語地域にも、武道研究に関しては歴史的な大きな蓄積があるのだから、武道に関わる大学や研究機関には、それを生かし、国際的な場において「対応」（問題の適切な理解と距離）・「発信」（独自性の伝達）・「対話」（他者との差異に触れ変化しながら普遍性へと向かう）を行うことで、新たな価値発生（世界各地の学生の受け入れ、研究者交流による国際的な学術研究の自律性の獲得、さまざまな国際企画やフォーラム創設を通じた研究・教育機関としての独自性の確立やアピールなど）を図る、たしかにチャンスがある。こうした状況において、「国際」化に開かれ／「武道」という独自性・普遍性を有する価値をもつ／「大学」という名の研究・教育機関（地域に立脚しつつ普遍性をめざす学生・研究者の集団）のポテンシャルは、大きいと言っている。

こう考えたとき、最初に述べたような「データベース」作成は、緊急かつ必須の課題だろう。蓄積されてきた文献研究の成果はもちろん、中林信二の系譜に繋がるような探究の独自性・可能性を、そのつど適切な文脈に「対応」しつつ「発信」し、「対話」するためにも、世界の武道研究・武道受容を知ることは不可欠であるだろう（たとえば欧州諸国の研究も、旧植民地などとの関係やグローバル化の現実において、世界のさまざまな地域と繋がっている）。情報収集・翻訳だけではなく、問題設定をしつつ整理・検討・考察し、そこに潜んでいる問いかけを、さらに進んで尖鋭的に探究することが求められている。

¹ 「ICANAS 武道学シンポジウム座談会」における高橋進の発言、身体運動文化学会編『武と知の新しい地平―体系的武道学研究をめざして』、昭和堂、1998 年、220 頁。

² 2022 年 10 月 15 日、日本武道館主催、日本・ハンガリー両政府関係機関などの協力で行われた「日本とハンガリーを結ぶ武道文化交流事業」、阿部哲史による「閉会の辞」での発言。「コーディネーター報告」『日本とハンガリーを結ぶ武道文化交流事業・報告書』（日本武道館、2023 年、34 頁）も参照。

³ 『武道論集 III グローバル時代の武道―比較文化論的考察とグローバル化に向けての課題―』（国際武道大学附属武道・スポーツ科学研究所、2012 年）巻末の「外国語による武道文献」にフランス語文献目録があるが（222-223 頁）、わずかな冊を除けばほとんどが英語からの翻訳・重訳の文献で、通例の意味での「フランス語文献」の目録とは到底いいがたい。

⁴ 前掲『日本とハンガリーを結ぶ武道文化交流事業・報告書』「質疑応答」（21 頁）に記載がある。なぎなたについて「なぜおもに女性が行うのか」、少林寺拳法について「中国由来のものなのになぜ「日本の武道」なのか」という、国際的な場では当然出てくる、また誰もが疑問に思う問いに対し、驚くべきことに、明確で適切な応答は全くなされなかった。

⁵ 筆者は、2023 年 4 月より、国際武道大学附属武道・スポーツ科学研究所研究員として、欧州における武道研究の現状調査を委嘱された。本稿は、2024 年初めの発表を期して 2023 年 10 月に脱稿されたものであるが、本稿の内容とは全く関係のない諸事情により発表が遅れたこと、そのため当時最新であった情報が 2023 年秋の段階にとどまっていることを特に記しておく。

⁶ ただし、出版書籍は英語からの翻訳が多く、武道の伝書などについても英語からの重訳がほとんどである。

⁷ 語の定義・使用・初出・歴史・語源・用例や先行の議論などは、いうまでもなく文献学的にも重要かつ興味深い問題だが、紙幅の都合上ここでは語誌について行った検討を記載しない。フランス語で書かれた先行の議論として、Gérard Fouquet, « Que faut-il entendre par arts martiaux ? », *Les Cahiers de l'INSEP*, 12-13, 1996, pp. 55-70 をあげておく。

⁸ 2009 年以前に関しては、Benoit Gaudin, Samuel Julhe et Jean-Paul Clément, « État des lieux », *Acte de la recherche en science sociale*, Seuil, 179, septembre 2009 における、英仏語圏の人文・社会科学のマーシャルアーツに関する博士論文調査も参考にした。

⁹ マーシャルアーツに関する 2022 年までのいくつかの仏語雑誌特集をあげておく。*Les Cahiers de l'INSEP*, Institut national du sport, de l'expertise et de la performance (INSEP), 12-13, 1996, « Arts martiaux, sports de combat »; *Acte de la recherche en science sociale*, Seuil, 179, septembre 2009, « Pratiques martiales et sports de combat »; *Aspects sociologiques*, Presse de l'Université de Laval, 17-1, août 2010, « Société et arts martiaux »; *Staps : Revue internationale des sciences du sport et de l'éducation physique*, De Boeck Supérieur, 136, février 2022, « Sports de combats, arts martiaux et sociétés ».

¹⁰ Michel Brousse, *Les racines du judo français: Histoire d'une culture sportive*, Presses universitaires de Bordeaux, 2005 が詳細な文献目録も含めて有益である。また、日本語で書かれたものとしては、1930 年代以降のフランス柔道史を記述した星野映の

論稿、精緻な社会学的方法論をもとに現代フランスの柔道教育を検討した磯直樹の論稿が注目される。星野映・中嶋哲也・磯直樹編著『フランス柔道とは何か―教育・学校・スポーツ』、青弓社、2022 年、「第 5 章 フランスにおける柔道の成立」、115-141 頁。

¹¹ Brousse, *Ibid.*

¹² 代表的なものとして Kenji Tokitsu, *La Voie du karaté : pour une théorie des arts martiaux japonais*, Seuil, 1979 et *Méthode des arts martiaux à mains nues*, Robert Laffont, 1987. 日本語では、この 2 つの仏語著作をもとにその後の考察も加えて書かれた本として、時津賢児『武道の方法叙説』、壮神社、1993 年をあげておく。ただし、その優れた分析的探究に比べ、時津がしばしば言明する比較文化論には賛成できない面も多い。

¹³ フランスでの合気道の盛行については社会学的方法に基づく研究がある。Christophe Gobbé et Bastien Soulé, « Examen sociologique d'une " innovation martiale " : l'exemple de l'aikibudo », *SociologieS*, Association internationale des sociologues de langue française, 2022. なお、空手については、江戸時代以前に起源をもつとされる武芸・武術とは異なる。英仏語圏の歴史的研究でむしろ意識されやすい植民地主義批判の観点は、当然ながら避けては通れない。船越義珍らによる空手の「本土」への本格的な導入は、いまに至る「武道」の「伝統」がほぼ創出されてきた戦間期＝大正期である。ここでは、「日本武道」というとき、思想的に見て、やはり同時期に成立の「日本民俗学」が、柳田国男や折口信夫との関係のなかで伊波普猷が確立していく「沖縄学」なくしてはなかったことを想起しておこう。

¹⁴ Gabrielle et Roland Habersetzer, *L'ultime encyclopédie des arts martiaux de l'Extrême-Orient : technique, historique, biographique et culturelle*, Amphora, 2019.

¹⁵ Florence Braunstein, *Penser les arts martiaux*, Presse universitaire de France, 1999, *Les arts martiaux aujourd'hui : États des lieux*, L'Harmattan, 2001 et *Age des héros, âge des guerriers : Géographie sacrée et corporelle du guerrier japonais avant l'ère Meiji*, L'Harmattan, 2005.

¹⁶ Brousse, *Ibid.*

¹⁷ Jean-Noël Blanchette, *Spiritualités et arts martiaux japonais*, Publibook, 2019

¹⁸ Coralie Camilli, *L'art du combat*, Presses universitaires de France, 2020. なお、日本武道ではなく中国武術に関する本であるので本文には出さなかったが、注目すべきと思われる哲学的著作として、エマニュエル・ルノー（パリ第 10 大学教授で、ヘーゲルやデューイの哲学の研究者）と有名格闘家エミン・ボツテベとの共著がある。Emin Boztepe et Emmanuel Renault, *Philosophie des arts martiaux modernes*, Vrin, 2017.

¹⁹ Basile Doganis, *Pensées du corps : La philosophie à l'épreuve des arts gestuels japonais (danse, théâtre, arts martiaux)*, Belles Lettres, 2012, p.190.

²⁰ ドガニスとはバリのエコール・ノルマル在学中に東京に留学（パリに引き続きそこで剣道の実践も行う）、リヨンのエコール・ノルマルで哲学を教えた後、ギリシアの難民危機―エーゲ海の島に流れ着いた少年の動かない身体の写真とともに世界的に報道された―の際に教職を離れ、ギリシアで映像作家としての活動を開始、自分自身国境を越えて移動しながら、難民（＝通過したいと望む身体／個体）を主題とした映画を撮った。「相関主義批判」のメイヤスーは、認識論的限界を指定して結局は「もの自体」を捉え得ないカント以降の「相関主義」を批判し、

「新実在論」をいうガブリエルは虚構の登場人物にさえ「もの自体」の実在を見る——だが、けっきょくはヴァーチャルな情報化時代の潮流の内部にあるこれら「新しい哲学」に対し、ドガニスの哲学的思考ははるかに具体的、端的に現実的で、彼自身が「文化」の外へと移動し、思弁的ではない自在なやり方で、実在としての身体とその変容を思考し続けている。なお、フランス現代思想に影響を受けた日本人による日本語の武道論としては、ドゥルーズやベルクソンの優れた研究から出発した前田英樹、レヴィナス研究者として知られる内田樹の一連の著作がある。両者とも武道の実践者であり、活発な著述活動が続けている。

²¹ この時期以降に西欧において受容された禅などの思想・文化は——たとえば鈴木大拙が卓越した思想家であることは変わらないにせよ——、1993年にベルナル・フォールによって書かれた著作に示されたように、誤解や神秘化をはらんで「国粋主義」の「精神性」に接近していく（そういう否定的な意味での「神秘主義」の）面があったことがしばしば論じられている（ベルナル・フォール「禅オリエンタリズムの興起——鈴木大拙と西田幾多郎」、金子奈央訳、(上)、『思想』2004年4月号、135-166頁、(下)、同2004年5月号、124-144頁）。オイゲン・ヘリゲルの『弓と禅』は、この時代に書かれ、武道受容においても重視されてきたが、山田奨治による重要な批判的検討がある。山田の研究はオリエンタリズム批判の理論をあてはめたものではなく、独自の「情報学」的探究に基づくものであるが、「禅オリエンタリズム」研究に代表されるような（日本学を含む）「地域研究」の文脈への、すぐれた応答であったともいえる。山田奨治『禅という名の日本丸』、弘文堂、2005年。

²² Kenji Tokitsu, *Miyamoto Musashi: Maître de sabre japonais du XVII^e siècle L'homme et l'œuvre, mythe et réalité*, Seuil, 2008 [édition original, 2003 ; nouvelle édition, 2023]. 武道伝書など芸道論の文献学研究の成果として渡邊一郎・郡司正勝・西山松之助校注『近世芸道論』（岩波書店、1986年）があり、「原典」とされるものをめぐって堅固な文献批判を繰り返していくことの重要性は論を俟たない。『五輪書』について、近年では、インターネットサイト「播磨武蔵研究会」の鈴木幸治による『五輪書』の詳細な文献学的・思想史的検討が、既存の学術団体の外において行われたものではあるが、それだけにいっそう注目すべき成果である（現在、以下のURLで閲覧できる。<https://siritai.net/>）。もちろん、文献学的研究自体の社会性・歴史性・政治性についての批判はきわめて重要だ。足立賢二『「古武道」伝承の歴史人類学的研究——モノ・ナマエ・ワザの過去と現代』（言叢社、2022年）は、独創的かつ確固としたやり方での参与観察・古文書検討によって、近年の武道研究の書籍として最も注目すべき達成と思われるが、戦後の武道研究の成立や、武道の「文化性」の創出、「文化財」としての「武道」の成立についても、鋭い批判的・系譜学的検討を行っている。同書、235-271頁参照。

²³ *Ultime combat. Arts martiaux d'Asie : catalogue d'exposition au musée du Quai Branly septembre 2021 - janvier 2022*, éditée par Julien Rousseau et Stéphane du Mesnildot, Musée du Quai Branly, 2021.

²⁴ *Archives des sciences sociales des religions*, Édition de l'École des hautes études en sciences sociales, 201, janvier-mars 2023, « Les catégories religieuses et séculières de la martialité ».

²⁵ 最新の論集として *Innovation. Sports de combat & Arts martiaux*, sous la direction de Aurélie Épron, Pierre Philippe-Meden et Frédéric

Heuser. Presses de l'Université de Toulouse 1 Capitole, 2021[2016年の学会大会の論集].これまでのこの学会大会の情報（回次・年次・開催地・分野・発表数、または題目など）について日本語で記しておく。第1回、1991年（マルセイユ）、神経科学、医学、生体力学、生理学、12発表。第2回、1992年（マルセイユ）、神経科学、生理学、医学、生体力学、歴史、社会学、心理学、28発表。第3回、1994年（パリ）、生理学、医学、生体力学、心理学、神経科学、教育学、教育法、歴史、社会学、哲学。第4回、1996年（ボワチエ）、同上、45発表。第5回、1998年（トゥールーズ）、同上。第6回、2000年（アミアン）、上の分野に、マルチメディア、指導方法などが加わる。第7回、2002年（トゥーロン）。[第7回～第9回は今のところインターネットで情報が見つけれず、詳細不明。]第8回、2006年（タルブ）。第9回、2008年（トゥーロン）。第10回、2010年（ディジョン）、多分野・多数の発表。第11回、2012年（トゥールーズ）、「倫理とコンバットスポーツ」。[第11回以降は一応の題目が定められ、数年後に論集が出版されている。]第12回、2014年（トゥーロン）、「健康、コンバットスポーツとマールシャルアーツ」。第13回、2016年（リヨン）、「コンバットスポーツとマールシャルアーツにおけるイノベーション」。第14回、2018年（トゥールーズ）、「コンバットスポーツとマールシャルアーツにおける教育」。第15回、2021年（リール、オンライン）、「コンバットスポーツとマールシャルアーツにおける危機と安全」、第16回、2023年、「身体技法、コンバットスポーツとマールシャルアーツ——日常からオリンピック・パラリンピックへ」（英国「マールシャルアーツスタディーズ」学会との共同開催）。

²⁶ 最新の論集として *Arts martiaux. Du religieux et des rites*, dirigé par Olivier Bernard, « col. L'univers social des arts martiaux », Presse de l'Université de Laval, 2022.これまで出版された論集の題名・刊年を日本語で記しておく。『マールシャルアーツの世界の舞台裏』2014年、『マールシャルアーツ——イメージ的なものの力』2016年、『マールシャルアーツ——批評的視線と研究の展望』2018年、『マールシャルアーツ——教育と介入のあいだ ジャック・エベール追悼論集』2019年、『マールシャルアーツとテレビゲーム——文化との関係は？』2020年、『マールシャルアーツ——実践と同時代的価値の研究』、『マールシャルアーツ——宗教的なものと儀礼について』2022年。

²⁷ ベネットの数多い著作から、ここでは以下の英語書籍を挙げるにとどめておく。Alexander Bennett, *Kendo: Culture of the Sword*, University of California Press, 2015.またサンチェス・ガルシアの著書は、Raul Sanchez Garcia, *The Historical Sociology of Japanese Martial Arts*, Routledge, 2020. なお、後者の本をめぐる日本語での考察・応答としては、村下慣一「エリアス学派による合気道研究の新規性と課題：サンチェス・ガルシア『日本武道の歴史社会学』の批判的考察」（『スポーツ科学研究』第4号、2020年3月）が優れる。同じ著者による同主題の英語論文もある（*Ritsumeikan International Postgraduate and Academic Conference 2020 Proceeding Book* 所収、1-21頁、2020年2月）。

²⁸ *Martial Arts Studies*, Cardiff University Press. <https://mas.cardiffuniversitypress.org>.

²⁹ Paul Bowmann, "Introduction : (De)Constructing Martial Arts (Studies)" in *Deconstructing Martial Arts*, Cardiff University Press, 2019.

³⁰ この大会は 2023 年 6 月 28 日～30 日、ボルドー大学で開催された。ボルドー大学人間科学研究所の公式インターネットサイトで英・仏・スペイン語の「各発表要約」を閲覧できる。
<https://www.mshbx.fr/wp-content/uploads/2023/06/230628-version-2-livret-resumes-JORRESCAM.pdf>

³¹ *Martial Arts Studies, Issue 6: New Research on Japanese Martial Arts*, Jul 2018. <https://mas.cardiffuniversitypress.org/8/volume/0/issue/6>

³² *Arts martiaux. Du religieux et des rites*, *ibid.*

³³ *Martial Arts Studies, Issue 12: Where Martiality and Religion Meet*, Jun 2021. <https://mas.cardiffuniversitypress.org/14/volume/0/issue/12>

³⁴ ロシアの一方的侵略に始まり停戦が国際的議論となることもなく続くウクライナ戦争に際し、エフゲニー・ブリゴジンが率いる PMC「ワグネル」の諸地域での活動とその怖るべき結末が大きな国際的話題になったことは、記憶に新しい。

³⁵ Jean-Marc de Grave, « Introduction. Les catégories religieuses et séculières de la martialité : dimensions technique, linguistique et sociale », *Archives des sciences sociales des religions*, 201, *ibid.*, p.11-28.

³⁶ Édouard L'Hérisson, « La mise en gestes de la voie des divinités. Voies des armes, des *kami* et de l'Empire chez Ueshiba Morihei », *Ibid.*, p.64. なお本稿の続く部分でフーコーの概念「主体化 subjectivation」に言及したが、これは同じ哲学者のやはり重要な概念「従属化＝主体化 assujetissement」と異なるものであることのみ付言しておく。

³⁷ Alexis Fontbonne, « Pierre Bourdieu hérésiologue », *Ibid.* p.165.

³⁸ Christophe Gobbé, « L'aikibudo: un mysticisme sans dieu », dans *Arts martiaux. Du religieux et des rites*, *ibid.* p.98.

³⁹ イグナチオ・デ・ロヨラ『霊操』、門脇佳吉訳・解説、岩波文庫、1995 年。

⁴⁰ Voir Jean Baruzi, *L'intelligence mystique*, Berg internationale, 1985 ; Michel de Certeau, *La Fable mystique. XVIe-XVIIe siècle*, Tome I, 1985, Tome II, 2013 ; Jacques Lacan, *Le Séminaire XX. Encore*, Paris, Seuil, 1975.

⁴¹ たとえばバジル・ドガニスは、武道の身体を論じた前掲書で、心身論に関する彼の立場には、スピノザの「心身並行説」が近いと述べる。スピノザは「古典的な二元論（精神・身体）に反対して唯一の実体を仮定」し、あくまでひとつの実体の、たまたま区別された「二つの様態」（精神・身体）が共存・対応すると説いている、と要約しつつ、その対応関係に偶然が入り込んで変化していく「多様」な状態が、武道やダンスの身体に現れているとする。Doganis, *Ibid.*, p.168-169.

⁴² Thabata Castelo Branco Telles et Cristiano Barreira, « La spiritualité dans les arts martiaux: perspective phénoménologique », *Arts martiaux. Du religieux et des rites*, *ibid.*, p.427-450.

⁴³ Louis-Étienne Pigeon et Frédéric Dubois, « Les arts martiaux : une perspective philosophique », *Arts martiaux : étude des pratiques et des valeurs contemporaines*, dirigé par Olivier Bernard, « col. L'univers social des arts martiaux », Presse de l'Université de Laval, 2020, p.23-38.

⁴⁴ 2020 年の論集のこの論文の結末では、剣道で立ち合う二者の身体間には「調和」があるとされ、2022 年の論集で武道の「精神性」を現象学的に検討するという論文では「平和化」の語が用いられる。前者は西田幾多郎や和辻哲郎の英訳書籍に加え、湯浅泰雄の身体論の英訳書籍をしばしば引き、「心身二元論」ではない、心身の「統一[一元性]unity」の経験が武道にあるとする。

⁴⁵ リシールに学んだ現象学研究者の村上靖彦は、メルロ＝ポンティやリシールの概念を踏まえて、「踊りの型や武道の型という意味での「行為の型」が、心的疾患で失われた創造的な意

味生成能力の回復を助けると書く。村上靖彦『治癒の現象学』、講社選書メチエ、2015 年、62 頁。武道の「型」については源了圓編『型と日本文化』、創文社、1994 年参照。

⁴⁶ Stéphane Barelli, « Réflexions sur la communication chrétienne par le jiu-jitsu brésilien et les arts martiaux mixtes », *Arts martiaux. Du religieux et des rites*, *ibid.*, p.143-196.

⁴⁷ Raphael Schapira, « La foi en mouvement : arts martiaux évangélistes en périphérie de Rio de Janeiro », *Ibid.*, p.127-142.

⁴⁸ Birgit Krawietz, « Repenser la lutte à l'huile turque: conceptualiser l'islam musclé et les arts martiaux islamiques », *Ibid.*, p.227-258

⁴⁹ Matteo di Placido et Lorenzo Pedrin, « Explorer la spiritualité engagée à travers les arts martiaux. Les pédagogies de l'engagement dans la Boxe Popolare et l'Odaka Yoga », *Ibid.*, p.197-226.

⁵⁰ Doganis, *Ibid.* p.173.

⁵¹ 舞踊のこうした身体性を精神分析の観点から論じることとも可能だろう。フロイトの精神分析は、パリのサルベトリエール病院で「ヒステリー者」の身体（精神的な疾患を理由に、錯乱的な言動とともに痙攣や意味づけ困難な激しい動きが現れる身体）に出会うところから始まるが、そこにあったのは、他者（第三者）の視線を準拠としての、無意識の身体性と〈欲望〉の問題だった。現代フランスでは、精神分析に影響された法人類学者ピエール・ルジャンドルが、西欧法の起源であるローマ法や教会法のような、準拠枠としての「テキスト」（カトリックの典礼など「演劇的」に構成されたものもふくむ）が、近代西欧の「身体」にいかに影響を与えてきたか、その変容への反応が個々の身体（性的身体）によっていかになされてきたかを、16 世紀以来の演劇論も踏まえ、ダンスの身体をめぐる考察しており、参考になる。Pierre Legendre, *La Passion d'être un autre. Étude pour la danse*, Seuil, 1978. また、精神分析を離れて、本稿で言う「個体化」については、以下を参照。Gilbert Simondon, *L'Individuation psychique et collective*, augmentée d'une partie sur l'Histoire de la notion d'individu, suivi de la thèse d'État de Simondon, *L'Individuation à la lumière des notions de formes et d'information*, Paris, Jérôme Millon, 2005 ; Édition révisée parue en 2013.

⁵² 中嶋哲也の記述によれば、「日本の国土とその精神が一体であること」（『日本精神』、1924 年）を説く安岡正篤は、剣道の実践者でもあり、「天皇と国土と個人」の「一体感」を主張して、剣道の「形稽古を積んでいくことで人格の純粹統一」が現前すると述べた。安岡は、つねに死を意識する形稽古にで得られる（日本精神の発揮としての）「人格の純粹統一」こそ、西田幾多郎の「純粹精神」やベルクソンの「純粹持続」の状態だとする。中嶋哲也『近代日本の武道論——〈武道のスポーツ化〉問題の誕生』、国書刊行会、2017 年、444-451 頁参照。

⁵³ フォーサイスとラバンについては、松井智子「フォーサイスとラバン——フォーサイスの『インプロヴィゼーション・テクノロジー』に見られるラバンの影響と独自の展開——」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』3、2012 年、25-39 頁。

⁵⁴ 日野晃、押切伸一『ウィリアム・フォーサイス、武道家・日野晃に出会う』、白水社、2005 年。

⁵⁵ この点で、筆者は、世阿弥の能楽伝書の「かかり」の語と武道の関連についての論考を準備中である。『兵法家伝書』には「懸・待（けん・たい／かかり・まち）」の語があり、『五輪書』にも「かかり」の語が現れる。世阿弥に始まる独特な「かかり」の語用は彼が師事した二条良基の連歌論——とくに一連の句の附合の関係（「係り」）——とともに考えられるべきだ。附合における言葉の関係は複雑なもので、物理学者・寺田寅彦は（連歌でなく連句に関して）位相幾何学のリーマン多様体にとたとえ

ている。能楽と武芸の関係については金春禪鳳『申楽談義』の記述や金春七郎氏勝が柳生宗矩に武芸を学んだことなどからよく言及されるが、「かかり」の語の再検討によって、新しい視点を提示し、たとえばバジル・ドガニスの議論への応答を試みたい。この語をめぐり、筆者は、語義や西欧での訳語を検討、仏語圏での著名な能楽の実践者であり世阿弥・禅竹の伝書の翻訳者でもあるスイス人演劇研究者アルメン・ゴデルに直接見解を尋ねるなどしており、能楽や他の芸道（茶道など）の国際化の問題も踏まえて探究しつつある。

⁵⁶ そこでは、性的身体にかかわる多様性も再発見されうる。

⁵⁷ 中嶋、前掲書、373・374頁、407頁参照。中嶋は、武道／スポーツをめぐる近代の「言説」の丹念な調査を行っている。たとえば20年代後半前後の「武道のスポーツ化」の言説では、「スポーツ」の語には、当時の社会的文脈として、たんなる伝統軽視というより、今思う以上の「進歩」的含意があり、それが学生・大衆に肯定的に受け取られていた。だが、日本の戦争が「総力戦」となった時には、「武道の精神性」という「伝統」概念の文脈的意味も変わり、軍部の「戦技化」の考えからは、武道であれ「古武道」であれ、個人の修養として主張された武

道の精神性の言説はいわば不要で、いまやそうした言説は、以前対立していた筈のスポーツの言説の方に近づいて見えるという、逆説的なことが起こる。中嶋のこの調査が示唆するような、言語行為への繊細な視線は、まさにいま必要とされるものでもあるだろう。

⁵⁸ Michel Foucault, « La vie des hommes infâmes », dans *Dits et écrits*, III, 1994, p.237-253 [édition pré-originale, 1977].

⁵⁹ Doganis, *Ibid.*, p.189.

⁶⁰ *Ibid.*, 149.

⁶¹ Pierre Clastres, *La société contre l'état*, Minuit, 1974.

⁶² 酒井利信、阿部哲史、二宮恭子、堀川峻「東欧における武道の教育力に関する研究：ユーゴスラビア紛争時における元兵士の事例を中心に」、『武道学研究』54巻2号、2022年、125-139頁。

⁶³ ノルベルト・エリアス、エリック・ダニング『スポーツと文明化——興奮の抑制』、大平章訳、法政大学出版社、2010年[原著1986年]。エリアス学派と武道研究についても、註27にあげた村下貫一の研究が非常に参考になる。

⁶⁴ 中林信二『武道論考』、中林信二先生遺作集刊行会、1988年、204-205頁などからの独自の考察。